

べている。しかしながら、その多様な分析項目が煩雑になっている。その結果、ひとつの不敬事件が、いくつかの分析項目の説明に使われる結果になっている。そのため、不敬事件の多様性は理解できても、その事件の持つ性格の把握が見えにくくなっているように思われる。分析項目の精選が行われた方が読みやすかったのではないかと、この感想を持った。

いくつかの疑問点を提示したが、本書が不敬事件を通して近代天皇制、あるいは、近代天皇制と教育の問題について、多くの新たな知見をもたらした、刺激的な好著であることは間違いのない事実である。本書は、今後の近代天皇制を扱う研究において、参照すべき基本的な先行研究に位置付くであろう。筆者の研究のさらなる進展により、近代日本における不敬事件の総体を提示されるよう、希望してやまない。

(思文閣出版刊 2010年2月発行 B5判 598頁 本体価格13,000円)

藤井 千春 著

『ジョン・デューイの経験主義哲学における思考論
知性的な思考の構造的解明』

松下 良平 (金沢大学)

「デューイ・ルネサンス」以降、アメリカを中心に海外のデューイ研究は活気を帯びているが、日本でも近年、博士論文にまとめられたデューイ研究の成果が矢継ぎ早に何冊も公刊されている。本書もそのうちの一つであり、本書の元となった学位請求論文で著者は早稲田大学より博士号を授与された。著者はこれまで、教育の哲学的な研究を踏まえながら「問題解決学習」「総合学習」や社会科・生活科教育について論じ、また学校教育での活用を視野に入れながら教育の原理的な考察をおこなってきた。教育哲学と学校教育の現実を架橋しようとする著者の研究テーマおよび思考枠組みの双方に、デューイは深い影響を与えてきたと考えられるが、そのデューイについての永年の研究成果が本書である。

本書の目的は、「近代西欧哲学の認識論で論じられてきた思考」(1頁)を「批判」し「克服」するもの(i頁)としてデューイのいう「思考」を

位置づけ、その構造を解明することにある。デューイの説く「知性」に導かれた思考は、近代西欧哲学、とりわけ(デューイと同時代の)論理実証主義の説く「理性」や「経験」に基礎づけられた思考とどのように異なり、どのような特質をもっているのか。思考の「創造的な性格と反省的な(批判的な)性格の関連」あるいは「個性的な性格と協同的な性格の関連」に特に焦点を当てながら、この問題を追究しようとするのが本書である。

そのさい、近年のデューイ研究がしばしば強調するデューイ思想の時代区分や思想形成史には、あまり関心は向けられない。思考への「自然主義的なアプローチ」に注目するためであろうか、本書の冒頭で『民主主義と教育』(1916年)から『自由と文化』(1939年)までをおおむね研究対象とすると一方的に宣言され、いわば円熟期の思想に考察の対象は限定される。

本書では、いくつかのトピックごとに、「知性的な思考」をめぐるデューイの諸説を関連づけ、秩序立て、解説し、補足するというスタイルが採られる。デューイ思想をめぐる内外の先行研究が十分に解明していないところをさらに深く掘り下げ、デューイ自身が十分に論じていない点を、関連する現代の諸理論を参照しながら補強するといった具合に議論は進められていく。

まずは各章の概要を紹介しておこう。「第1章 デューイの経験主義哲学の柱立て」では、人間の思考を「実験主義」や「自然主義」の観点から研究するデューイ哲学の特徴が、「伝統的な哲学」と対比されつつ説明される。その上で、デューイが思考に関する諸要素(生命体と環境、主体と客体、習慣と熟慮、衝動と知性、思考と態度など)を「包括的に」捉え、それらを「一元的、連続的に」関連づけようとしたことが指摘される。

「第2章 知識と思考」では、デューイの知識論に対する伝統的な哲学の立場からの批判を検討することを通じて、デューイの道具主義的な知識論の特徴が浮き彫りにされる。さらに思考における「概念」の役割について考察がなされ、概念の精緻化と思考能力の増大が相関的に進行することが指摘される。

「第3章 示唆と反省」では、問題解決のための観念の「示唆」(創造的なもの・合理的に統制できないもの)とその「反省」が連続的な関係にあることについて説明される。さらに状況の明確化と

観念の現実化・確実化が相関的に進行することが指摘された上で、習慣的に発生するものから科学的発見につながるものまでの3つのタイプの示唆の分析を通じて、習慣と想像(による創造)が「一元的、連続的に」関連づけられる。

「第4章 探究と思考」では、『思考の方法』(1933年改訂版)における「反省的思惟の五つの側面あるいは局面」の意味が検討され、それらが探究の「段階」や、思考を導き統制する規則(先験的に設定された普遍的な規則)ではなく、あくまでも「思惟の展開を反省するための観点」であることが主張される。そのさい、『思考の方法』(1910年初版)『民主主義と教育』『論理学』における同種の説明のあいだの異同、およびその背景(実験主義から自然主義への重点の移動)についての考察も添えられる。

「第5章 コミュニケーションと思考」で、いよいよ教育論が前面に出てくる。まず、個人と社会を対立的に捉える「近代教育学」とは異なり、教育を通じて個人が分化すると同時に共同体の構成員として統合されるとするデューイの教育論の要諦が示される。次に、民主主義社会の本質としての協同的活動を促す相互的な思考としてデューイのいうコミュニケーションが位置づけられた上で、デューイが教育目標とみなした「成長する能力の増大」が協同的で探究的なコミュニケーションの能力と関連づけられ、さらにデューイの提示する「教授学習活動」が「教師と子どもの相互探究的なコミュニケーション」の活動であることがクーンやショーンの成果とも関連づけながら説明される。最後に「結論」では、全体が総括されるとともに、デューイの哲学から引き出される現代的論点がいくつか指摘される。

論理実証主義が華やかなりし頃にはもはや時代遅れとして無視されがちであったデューイの思想が、実は論理実証主義を乗り越える側面をもっていることについては、著者自身も知悉しているように、特にローティ以降さまざまな角度から論じられてきた。本書もそのようなデューイ再評価の潮流に沿ったものである。ただし、そこに新奇な知見や論点を投入して論争を呼び起こすというよりも、これまでのデューイ再評価の議論もふまえながらデューイの思考論を再定位し、その特質や意義について教育論を見据えつつ全体的な見取り図を描くことが主眼になっているといえよう。

ここでは、思考という限定されたテーマに沿って、デューイの全体論的な理論の有り様が具体的に浮き彫りにされていく。思考が従属すべきもの(理性や経験といった究極的な認識規準)も、思考に従属すべきもの(衝動・習慣や環境・客体など)も共に否定されたところで、近代西洋哲学の諸々の対立図式に従って分断・隔離されてきた、思考をめぐるさまざまな要素が、相互に——著者がくりかえし用いることばを使えば「一元的、連続的に」——関係づけられ、複雑に入り組んだ連関図を形成していくのである。

なかでも興味深く思われたのは、思考の諸側面・局面がいわば循環的に絡み合っており、それゆえ思考は合理的に統制できないという指摘である。そこには、探究や思考の過程を手続き的ルールや段階に置き換えることへの異議申し立てが含まれているが、日本の教育界ではこれまでデューイの問題解決学習をわかりやすい段階論に切り詰めて受容する傾向があっただけに、それを根本的に批判する本書の意義は大きいといえよう。

もっとも、デューイの哲学や教育論が「近代西欧哲学」を乗り越え、「近代教育学」とは異なるものとして位置づけられていることに目を向けたとき、本書が慎重に問題を限定した上で議論の細部に意を注いでいることの誠実さを認めつつも、若干の問題を投げかけないわけにはいかない。

第一に、著者はデューイのいう思考や探究の目的が「確実性を持って意図した結果を生み出す」(43頁ほか)ことにあるとするが、デューイ思考論の捉え方としてはかなり一面的ではないだろうか。なるほどその目的は、本書で分析対象にされている「丸木をかけて小川を渡る」場合のような初歩的な探究や技術知の探究には当てはまろう。しかしより複雑な状況下の探究では、当初意図していたものとは異なる事態が目的(問題解決)になったり、確実性がいくらか犠牲にされたりする場合もあると考えられるからである。「実験主義」よりも「自然主義」を強調し、21世紀の社会の複雑性を考慮に入れれば、なおさら思考や探究の目的的可変性や流動性や多義性は高まるであろう。この点をつまびらかにしない限り、デューイのプラグマティズムや道具主義が近代西洋哲学の権化(有用性を規準とする功利主義の変種あるいは目的に対する手段の合理性を信奉する思想の一種)であるかのような誤解を払拭するのは難しいのではな

かろうか。

第二の点も今の問題に関係する。本書では、デューイの教育論と近代教育学との違いが、個人と社会の相互規定的な関係や、協同的な探究的コミュニケーションを通じた意味の共有過程に照らして指摘されている。そしてそこに目を向けることにより、たしかに近代教育学の狭隘さを乗り越えていく上でのデューイの重要な貢献が明らかになる。しかし近代教育学との違いを鮮明にするのであれば、そこにとどまらずさらに「教授学習活動」に尽きないより包括的な教育的作用や、意味の共有を超え想定外の意味を生みだしていく異他的な他者との探究的コミュニケーションにも目を向ける必要があったのではなかろうか。そのための手がかりになりそうな部分が本書の各所に見られるだけに、惜しい気がする。

第一の問題は、思考の全体論的な性格の説明を不必要に錯綜したものにしないう、あえて切り捨てられた部分にかかわっているのかもしれない。第二の問題は、教育論一般というよりも現代日本の学校教育への貢献を重視しようとして、あえて後景に斥けられた部分にかかわっているのかもしれない。だとすれば、本書そのものが、著者と読者の協同的な探究的コミュニケーションを求めているともいえる。異質な他者との探究的コミュニケーションによって著者の当初の意図が変容を遂げていくほどに、デューイのいう「思考」は信憑性を増していくのではなかろうか。

(早稲田大学出版部刊 2010年3月発行 A5判
400頁 本体価格5,800円)

小林 茂子 著

『「国民国家」日本と移民の軌跡

沖縄・フィリピン移民教育史』

近藤 健一郎 (北海道大学)

I

本書は、「沖縄での移民教育を受けた移民らが、沖縄人ゆえの差別に対して『追従』し、あるいは『対抗』しつつ現地での適応をめざす過程を、沖縄の移民教育の実践と渡航地フィリピン・ダバオでの移民としての自己意識の形成という2つの局面から、とらえよう」(本書4頁、以下頁数は本書の

ものである)としたものである。

こうした課題は、著者の移民教育をめぐる研究状況への批判に立脚している。著者は本書が交錯する研究領域として、近代沖縄教育史研究、植民地教育史研究のうち在外子弟教育、沖縄移民(史)研究をあげ検討している(6～9頁)。そのうえで、「国内での移民教育と渡航先で行われた移民のための教育」、その「双方を視野に入れて両者のかかわりのもとに移民教育を把握するという視点は弱かったといえるのではないか」(10頁)とする。それゆえに、沖縄と渡航地の双方に対する実証を課題とするのである。

本書はこれに対応して、「戦前期全体」(10頁)を対象時期とし、第一部「沖縄における移民教育の展開」と第二部「フィリピンにおける沖縄移民の自己意識の形成」の二部構成をとっている。

本書において、著者が分析の視点として用いるのが、「沖縄移民が必要にかられて自ら求めた内発的な側面を含んだ」ものとしての「必要的同化」(13頁)と、「沖縄移民の独自性を促す事象」としての「文化的異化」である(15頁)。

終章でのまとめに沿いつつ整理すれば、本書が論じたことは次のようになる。第一部では、戦前期全体について「必要的同化」を主とした移民教育を跡づけるにとどまらず、『島の教育』(1928年開催の沖縄県初等教育研究会の資料として沖縄県内全小学校に配布された冊子)において「沖縄人の進取性」など「沖縄人の長所」を喚起している点に「文化的異化」の志向性を見出した。第二部では、沖縄移民それぞれのなかに「日本人意識」と「沖縄人としてのアイデンティティ」という二層の意識があるとし、移民が1920年代後半以降に定住意識をもつようになったことによって、郷友会的社会基盤が強固となり、その二層は調和的に並存するようになったことを論じた。ただし、双方の課題を架橋することの試みについて十分でないことに著者は自覚的である(313頁)。

II

検討すべき第一の論点は、研究史上の意義についてである。近代沖縄教育史研究を例とすれば、いくつかの章でも研究状況にふれているものの、序章では「移民教育に関してはこうした代表的研究をみても言及している箇所は部分的にわずかである」(7頁)とすることで済ませている。ここで